賢女物語

下

1702
3上

藤村

賢女物語巻之五

因縁

第一 吏の妻あるよいのちをたすける事 付り

第二 押領使ゑみじが妻乃夏

第三 攜姫日女、民の妻乃卯ごりふ立をする事

第四 金民虎を追ひ事

第五 吏乃死をとゞめる付り 沈雲が 花雲が

福田文庫

第五 長谷の観音つまの事
第六 女房と夫とあるまじきまでなる事 付り
第七 業平の部欠の事
夫乃おもひ絶いろ〻くまでなる事 付り
蓋の丘みの事

賢女物語巻之五

一 夫のあめよのうちをとりふる事 付り 押領使ためのしの事

そもし女房いとまなきまでなるに対ぶるあるまて父母よりかうくをたてて屋うくをたてくれとなりてはつとの家ありあつりをてく男をうやまひきつとこと
まそまるをんなをたづねてこれ夫の影よりをを
あづをて帰とつ〻帰いつるとよむ字
ぞろへ女房いつまでも父母乃影よりとをもつる紙
ぐもをんとはせぞろ也おりとの影を書りとをり
乃すをとをもを極へ乃影よ

歸るとのゝ給ふて。歸と云ぬ。ゆるが極へよりあ
つまりて。吏の部とゝ。とゝ部とゝ。ゆるゝ部とゝ。
部〳〵と記。吏毎に。かゝくよたゝ人。なりしごとく
吏に。書物ゆゝ。男のあやうき事あらば。ゆるゝ
どすゝひまひ事。ゆゝ。ゆづよはなて。吏に。なんな記
屋うみとんがけて。おとこ乃部に。もうるなどふ。ちんじつ
うしひあうひうるゆこそ。まくゝの兵女といひつゞ
くれまゝ神で。我部乃ひし。押領使ゆゝ。とうゝ人
西ゝうゝ。平治のゝぐ。ゆしよあひくゝ。ゝくゝ。せを乃
ぐまんまゝ。吏梅とゝ。ひゝ平に。ふゆ部ゝうゝ。ゝ
乃ゝて。盜人。ゝふゆゝ。ゝあひぬやゝぐゝ。ゝ義人へを

乃ゝゝゝも。屋ゝて。押領使とゝ。ゝぐ。ゝあゝし
ゝぐんとゝて。部とゝ。ゝゝゝを。妻の女房ゝの。ゝふとり
ゝゝ。ゝ記ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。
と。ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ。
治乃。乱とのぐまんゆめ。ゝまゝでゝゝゝゝゝ。
ゝゝ。紙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
不ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
吏と。ゝゝ。我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
河ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

はるふむしろひてゝ
ゝるゝ。あんだもとりふきろ
ゝとゝ
ゝるれどゝ。鍋おがつまとあり。
ゝ。蒙とゆゝ
ゝ。ゝもつまゝとゝゝんゝゝ。ゝゝ
ゝもゝゝゝ

よりえあげるをとれば女の中へ彼こゝろんおもひ
そうりとまりふそうぞもるをけなれば盥人へ見もぐひ
岩木うりはら稲だあつらしとやありひくんこゝるく
なるぐをあしくろ海こゝろふるぐこれたあしみそ

二　さまちぐれひあの日中武乃こゝとの光ぐり事

我朝神代のるもあり一ふ屋まとだあのみこゝ
りたまはまあそしまひそのこゝろ東夷男乃せんぐ
とうひさぐこゝぐれだ拾まをたひ先ん〻あるよ
日ひ武男あづこゝよくぐりひ〻げ中妻の橋姫
もはとりふ先〻はまて強河の国よりこゝり富士野の

うて狩〻あり男しこゝよやをとつを
男をやきこゝろ〻たまこゝんとひ男村雨の剣とね
いく〻男系をあれのぐだ分のほうるつて歌乃こゝ
かりてたとくをやあうせぬ男東夷をこゝぐ
のひさぐこゝろ男こゝ先〻と紙よりむこゝ
をこゝろ偽よ沼風あ〻く吹て中毎あやうくえ
えくれだこゝちぐるひあ男ふむひて乃あう
かやこゝよなこゝろせあ〻くて八中毎あちまちづ
ひだ〻ぐまこゝさぐりそ新乃こゝぎなるべ
さあ〻んよあひてやこゝづ〻海よ入魂をとこゝぐ
たまこゝだ男をこゝ先んたまりあまこゝ乃友軍とも

さきとくゐ一ぞくバ弟乃浦へあよせかゞりふ
立ゆくゝんとして海中よりとび入ぬとこのゝゝとび
たまゝぞふと魂神のたゝりやうんぷあつき
浪風あらまちもづまりおとなくなを波
しまりぬまゝふる一人のゝゝしびあるゝ乃
軍兵ゝゝとけとひまゝ若ゝやゝひ
ぞひとつしあめゝとゝ紀四郎女ゝしびや

三 金氏虎をおしゝ事

ゝ為こゝのゝまゝふ國頼よ余天猛とゝ人
ぞのつまふさんゝといふをありおもい安東の
重尚ゝるゞしゝあなりゝ丈のゝ猛よゝゝゝ

そのまゝ皮骨をとりてるぶあるは美のてんあい
ぶちくきとゝろへあそびよゆきまろふいぐくた
なく虎をつまきてり天樋をとゝへぶふく入む
とゝひ書乃こんしきぶちゆ髪ゝもちゝぐりしゞ
傷よむしひうちさゝるねぶりをゝるぐ美のけ牙
よあやうきまのあゝやゝんとそぶぶるゝゝを
ゝゝもちつそだゝまつゝまあゝりをんまぶ虎を
てんあいをくゝへとあゝふりあもゝひあけゝを
あおどゝうきゝあゝぶりちたゝゝのけゝちゝ
矢とゝけ初んゝゝれぶゝうひきゝひよれ
それゝ花ゝゝび耳をゝんくぶゝ樋をゝちゝて

山ふくうゑあさりぬそんあいちうゝ紀伊をたをと
かりぷうゝ毎りうとりふうゝり俗ぷたゝくぷゝとと
つまをおりつよとゝゝきをゝごとゝくうちゝてぷあをく
いさあうゝものまくぷゝまるはき鹽石をはゝゝぬきご大
ひをとゝづをいゝきりひあをくぷなゝくおそゝゝきるゆ
いゝをゝりあゝかやゝのあまを紀獺をきんゝあの分
とゝてゝゝいゝまゝゝゝゝて遐ゝゝんよあゝゝうへゝをそれ
行ゝべゝきぷゝゝゝを虎尾をとゝべ耳をあれゝくゝて種を
をそゝきゝゝゝゝゝひをゝへゝよゝをんゝゝが獺んのふゝきを虎
もかんゝゝゝゝゝとゝをんゝゝたゝる毎ゝきあゝくゝきいゝゝぷゝきんゝ
ゝゝのをゝんあゝをゝんゝゝおゝそれあのゝゝくゝ事あゝゝんや。

獺の事

獺の事はいとゝ怪の事ぶゝのまでかんをゝを
ゝゝきゝゝゝひあゝぷゝきゝをふゝゝゝくゝゝくゝのゝまゝゝゝる
りのゝゝ更よひゝをゝゝゝゝ獺をはゝゝゝぷゝゝゝまゝひあ
ゝゝゝひゝゝゝ毎ゝ

〔ニ〕更の死をゝゝ紙をげゝく毎ゝゝ事 付り

花をゝゝぶはゝゝゝゝゝゝゝる

をゝゝそゝ人の毒ゝゝゝゝの更をまゝゝゝよりゝゝぷゝ又
ありてゝをゝゝをゝゝんゝゝゝゝゝゝゝ肉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

海といつりのちろろ
ぶべーまつぶろう
あぐくことのいろ絹うちよりあり又仏りてあげく
りのそのいろりふあくうくどぞまくとふまを
ぶぶろよりいちろたくもいまを波濤まて死
たりとまくあくもいぞいきたびあぐくふづきぶろ
ろ紙とり壱平ろいぶ我まろろよりいづきまとこ
海ぶぶそあろ人よそろうんとあくむぶとんあのあふ
ろうぶぶとまくあそくれぶやくりを
くをとろ人いぞ令のあくふぶき天令を
ぶのぎむくあくいぶあくず又の分よむくふり故
ろり女ろ夫と大ぶあくてぶやまひまりとむべき

事かんようありさ神だりろくよ死をと
いろのあたまといろまりぬその色
陳安添とと着むりんとあくぶ
くろが名報とりくあんくろものた餓死を
まで死をもちろちさくよくろまちろ
さくりぶづふりろ名もをくあひあ
くまあくりぶろぶふ妻の女房あぐひとりりろ
ろといぶ紀をあくまりろ良名をちづあよ
くろふ荒をくでふくれぬくろふ沼よくまりて
紀ぶぐくせんりあ。あのぶりよりむくべー
ぶんだきくをぶ紀よくをくまくろくあろふ

花雲が波をかぶり面べしぶきをひるがへしてい
つもかるがるを仰とくしぶ時雲をまちてかん
まうをとらげ花氏をたづせくもれとぶとかん淵
ひをきてあうちちき淵のぞこ者をまばし
をくなりみくりぶあぐひをとる紀氏女あり

又

呉紀が妻乃事

紀氏乃むすひやうぶのせうとうつる所面の侍あり
ぢめも影をきうくれども紀のこゝろ兼紀
朱張盜賊のたまあふうぞうれまづこを身とう
なりよくる。一門乃人ども紀ぐをたちをぞ落うせ
て今をあれむぞうをきくれども食のていと

ありあるを。女房あまりうあ〜くさひ。あんだ
乃函の極りあり。ゆきて。さたこんとて。ちゑ
まあり女子と。かんつまたる男子をと〜ひ。自。更衣
りうとも。をふそを。ひきて。あぐろく。行くるかゞ
日ごろあゆきもあ〜。おるつ。だかゆきて。き。ぬよやし
こ。あ極そ。八末。注ろ。ひまこふ。おくぶとりふ
ひりくるわどふ。きまんだのくるくこまうえたる。四あり
よゆきつきぬ。おを。日ろう。山。ほよあちろくろう
極をとろひ。ぷづふ。命をつぎ〜うぶあやことりふ。舘
つる。ぷ。ゆく〜人どもせぎりそり。長紙あまりよ
ぎえんう。とあるを。屋〜よあちうてぷるまごひ

とそ。たつ〜りうう。屋。行。乃うちまう。男。子。人。を
つま。ぷ。長紙の。極。とんろうもぷ。あなくいうり
ぷ。月んきひ〜。行者なれあや〜。き。極まて
こ。ろてどこよづるうんぷり。強盗の方人まく
あ。屋。んのやきこ。ぬんどうて。考。四せうやきて
ぷ。とり。見とり。湯。とりつく。二。四ぷどりせあう
ぎ。ろぷ。ろわどふ。りぷ。ふあう。妻やうたひる。夢
ま。ぎ。ろどて。浪。ちぎろふやきひてつまや
くと。ぬ。ろあよ。行。人。ふろうつまてきとり
〜。ろあろうやう。ぷあるたりんや。京乃人うや
ぷ。〜。ぎぷ。ぷ。の程。字。ぎりう乃。男。のぷりんどひ

はるばるあゆみこぎいたるあるあるとてあぐんおろ
しつせあるるるぐ。今ちらや妻おろさまてやあっ
らんとぢまの人まあるうりてとるる女房ちまを
きく書乃長紙ようぐひちるれだ。夢うつとも
紀まへどそちまれを角ちてぢはこ
らひるさ紙のうへ乃人ゆをそびまとちろさ
ちんとそちぬきんだふつまぐりとぢちれんこ
ともちかーうべー。新ちのぐへ作りてうさくをか
ぐさんうもちんぢくも母ともふおのぐみちよ
とりまつべーと二人のうたをあのきふひとんく
四角川のふるさ西へ分とちげむかーくりふくり

丈の長紙のぢまをちびぢうく携向
ともぬきいきつきあるるりくるが。妻やるた乃絡
うんとぢそぐ川角てよゆきてんまぐつまやよ
きあぐりそりぢつぐみおりひちやうこと弱
ぬるそちよ長乃ちぐあよ女房子た乃ちれち
きちんぢちぢきそちれ分をちげうとんてあり
ぢざんある須弟うあぢくめ乃まへよつまやるどりを
うーあひてづきそちれのうひあうんあるぐこく
づとなちんとそぢぐひく湖よ分をちげぬおれ
なるまぐどもあり。又ちはうんちろざーちと節
角ぐひなれりのあーぐや

六　そんをハあるひとをあるどろまでなるゆ

業別乃欠缺が事

そもそも人のまどりハ、ぜんまいをくもろよりつまるらしぶ屋うくなるといふやうに、かりざる也、どりうさ史姫乃ぶんなれやとなるものふてぢ紙ハ史いよあろうををさぶろくと絶法ぶ義とまりとしへどもぶるよ史とあるどりかろしひろ事ぶよれたるの乃ぶるひりぶやんごとるなるふぶさとをろんなれどもおりくまりゆーさをんをの

出まどしのことある事なるべしぶろう百をまりふるうまりどしひさくにようるしぶ人の書をなりのぶたくまりりて史よ神業紙つくとべき事かんろとまるべしぶされでりろてう番乃文公の所勇事といふ人の業別とゑ所へ使ゆさろるぶをよ欠缺といふ人あるぶ賢人なれどもぶるのりべさ農人とまり耕紙をたとあてとりつさををこりけぶあるぶ田乃ぶをとりて若ろる紙書田乃あぜそ史乃欠缺りどりあーとをへあろ紙乃ふりるぶ義たべしくかりまりぶろまるるあをとあり

らよとるるどる史の欠缺もぶいさろうなれある

どうあるべきかと。家乃夢をふかひしようとするよ
ありがたき。あるじよ礼義あるべしくらやくしかうあ
もてぞのはたらひ乃蜀黍をぬくくとちまとをんてと
こうるさどくよりしそぐあるうつり
ぬそをひうしとそれどみどきちゐんさし
あるうよもべしさ分として更ぬ乃稚義とさ海
つかるのだで人ゐあしべそべそさ人とはたろう
部欽とうびよ郷ぬ軍太史のくるあるあ多
乃知りをとぐさまるれどふうふとのみとさとて
陽のをまうでもあるものこうとろやぬきひとは
書乃京芸ゐるゆへ更と信ものがせこまだぬらと

を賢女とのひつぎ

七 更の塔もぞ

分蓋乃兵ごゝ

有へ所ゝ更よ所ゝ

ゝ所ゝ事をかもいるひとさび

ぱらるゝとおのゝ塔

ぱらるゝとゝ

先ほとゝなるべしゝ

ゝ所ゝ更の

ゝ所ゝ更ゝ

ゝ所ゝ

ゝ所ゝ

ゝ所

あらびと今いくさやぶれ死にしたるとりの
とりふ死せびらくいくさそうをとりの
さきとりしの下りとさんぐよりていらあけ
まてぞ死るこうてやうちうの蓋乃ほうを小ほうして
ぞびとの乃ほうをたぶんしかりあうちうなく
てやくくとうちまあ死うしさ紙のふさまバ紙
もおのでく自害せんとせーとちうおうちうの人
くとぶあられぞせんてうまびうりとのバ
おあ乃いくそのほうこうんもとびられぞふきて
ひうんとうのーぞうを今まであーしのうるは
こうぞとちぶ紙うれぞ死ちうこて紙家だうり

もいのちをあーこそくいうのびあうふあらびの
害とうあうものあうぞあるまあまでとちうきんと
乃事をれぞなんぢーをとうあうんもぬうさ度
とおりひく死せぞうんぬとうとうて死
のそあよ蓋のーとうくぞ死うとうこ
ふまぞ法ぞーー紙うまぞーー紙うまバ
法又死をとと今死死こ紙ぢーーぞんん
を義とやーーきおうくふをあうーく
死をとうのあうびーくぞうとうまぞうう
いこそおる事。ふまを仁とのうんや。蓋乃ーあを
おりひく仁義をとうる。紙を忠とのうんや忠法

さるものの仁義乃あるこゝろひなくして賢といちん
やうやう乃ぢんぎ忠信をうるひ世のものゝ〳〵て伺
乃めんぢくあるべき我をんなの身なれども精
のこゝろふそづくしくあるふりいちんや乃る
うりあひくとやかゝる不義なるこゝろんよりう
死こゝろこゝろ海ゐれとてまりかゝるとゝろりと
ねゝぢゝろゝとふさしあてはゝぬそむるしく
なるゝゝびとくゝの者ものゝゝとゝつゝ賢女
なりとゝんで將乃礼をとりつく幕をそその事よ
金百疋をとゝらせて蔓乃一帰をおゝあゝ先ゝゝ
とゝされど人の妻ハゝゝとゝひ不義をおゝるひて我

ちゝを丈のいのちをさゝけ奉ることあり〳〵ときゝふ
この丈夫ハ義をおもんじて丈とゝもにかんぎゝ
ときゝふまことゝふゝをおもんじ男女とりべきさいまを
りんくんのつまゝゝ者ハよく丈の義をいま
しるるものんゝゝなるべしとぞ

寛文九己酉年初夏吉辰

洛陽寺町

秋田屋八郎兵衛板行

福田文庫